

---

# じーちゃん怖い。

ポンジュニア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

じーちゃん怖い。

### 【Nコード】

N0606Z

### 【作者名】

ポンジュニア

### 【あらすじ】

心霊現象完全否定の主人公が、ある日心霊現象的なものを体験しちゃうお話。そして、色々と頑張るお話。

勢いとノリで書き上げた一作。

読みやすさは保証出来ませんが、温かく見守っててください。

## （前書き）

読みづらいかもしれませんが、ご了承ください。

地味に段落の付け所ミスってるかも。

誤字脱字報告。感想などがございましたら、ぜひお願いいたします  
！

突然だが、皆さんは幽霊、心霊現象などを信じていますか？

もちろんこの俺、大葉<sup>おは</sup> 玲次<sup>れいじ</sup>は完全否定派だ。

よく間違えられるのだが、『おおば』ではなく『おば』。大葉  
玲次だ。

その名前から、俺が通う中学校の奴らから『おばちゃん』やら『  
オバマ』やらと呼ばれている。ちなみに中3だ。15歳。

てかオバマは全く関係ないと思うのだが……あだ名というものは  
恐ろしいな。

で、話を戻すとだ。俺は幽霊やら心霊現象。怪奇現象。その他も  
ろもろの非科学的なことは完全否定派なんだ。

実際に体験した事はないし、見たこともない。信じるという方が  
無理というもの。

大体テレビとか雑誌に出ている心霊写真だって、誰かが合成して  
いる物が多いじゃないか。

だから俺は、絶対に信じない。だってそんなものいたら怖いから  
な。

考えてもみて欲しい。

見えないものがそこにいるとか怖すぎるだろ。つーか見えない訳  
がないんだよ。ありえない。

ペットボトルや水だって、透明だけど見えるだろ？あれと同じさ。  
見えないものは見えるに違いない。つまり、イコール見えないな  
んてものは存在しないんだ。

酸素や温度だって、機械を使えば見えるが。幽霊は機械でも見えないんだぜ？

カメラには映ったりもするが、あれは合成。あんなハッキリ見えるものか。

ハッキリ見えないが、この辺が顔に見えろとかいう奴は、きっと精神が病んでるのだ。だから見たくないものまで見えてしまう。そうに違いない。

てな訳で、俺は幽霊完全否定する一人なのだ。

でもまさか、そんな俺があんなことを体験する事になるなんて、その時は思ってもみなかった――

――それはある日の午後7時頃だった。

その日はちょうど、家族で外食に行くことになっていたのだ。ちなみに俺の家は、父、母、姉、俺、弟、叔父、叔母で暮らしていた。全部で7人だ。

で、その家族全員で出かける予定だったのだが。何とも運の悪いことに、俺は風邪をひいてしまったのだ。

久しぶりの外食、楽しみにしてたんだけどな。

俺はもちろん風邪のため、二階にある俺の部屋でお留守番になった。お留守番だぜ？ガツカリだ。

一応一軒家で、なかなか大きいと思う。

チャチャッと間取りを説明すると、一階は玄関上がって、すぐ右側に和室。そこにはひいじーちゃんの仏壇が置いてある。

まあ、俺は顔を見たことないから知らない人だけど、いや、覚えてないと言った方が正しいか。

ずいぶん小さい頃に会ったことあるらしいが、俺はもちろん記憶にない。生まれたてだからな。

で、和室とは反対側の左側には、みんなよく集まるダイニングキッチンがある。

ダイニングキッチンは広く、真ん中には大きなテーブルが。テレビなども置いてあるが、おもちゃや漫画などはない。あるのは雑誌類だけ。

おもに大人たちがくつろぐ場所で、子供部屋……つまり俺の部屋は二階にあるのだ。

姉貴や弟の部屋も二階だ。

そしてそのダイニングキッチンの奥のふすまを開けると、おもに大人たちの寝室だ。

母さん。父さん。じーちゃんに、ばーちゃんはそこで寝ている。

で、玄関から真つすぐ行つた所に階段がある。階段は途中でゆるやかにカーブしていて、階段が終わってしばらく進んだら、右手方向に、まず姉貴の部屋。

それよりちょっと進んだ左手側が弟の部屋。ちなみに弟の部屋の向かいはトイレだ。

弟がよく愚痴ってたな。トイレの臭いが部屋に入ってきて嫌だ。だがな弟。一番下は何事も我慢をする存在なのだ。

そんな弟の部屋をスルーし進んだ一番奥に、俺の部屋。俺の領域テリトリーが存在する。

そんなわけで、風邪でヨロヨロになりながらもマイ領域に足を踏み入れ、だらしなくベットに倒れこんでいる訳だ。

まあ、風邪といっても若干熱があるだけだし、ねてりや治るはずだ。

一応母さんは、『出かけるの延期しようか?』と言ってくれたのだが、弟や姉貴がとても嫌そうな顔をしてたので、俺は丁重にお断りしたのだ。

紳士だろ。俺。

「じゃあ玲次！行ってくるけど、本当にいいのねー？」

一回から母さんの声が聞こえる。

風邪引いてるし、あまり大声だすのは遠慮したいのだが……一回に下りるめんどくさが勝まさったので、俺は大きな声で返事をする。

「ああー！俺は平気だから、俺の分まで楽しんで来てくれー！！！」

実際、平気だしな。ちょっと頭痛がひどいだけで、熱もあまりない……いわゆる微熱だな。あとは平気だ。だから大丈夫。

「昨日あんなことするから風邪引くのよー！自業自得よー！！！」

姉貴だ。同じく1階からの声。

「うるせー！！あれは事故なんだよー！っーか早く行って来い！」

そう、あれは昨日のことだった。

親友の谷口と一緒に罰ゲームありのゲーム（トランプのスピードだ。知ってるか？）をし、僅差で俺が負け、上半身裸で学校から家まで全力疾走で帰ってきた。

さらに途中で夕立に会い、結果このザマだ。

今思えば、俺はよく通報されなかったと思う。近所の人たちが冗談が通じる人たちでよかったぜ。

まあ、そんなわけで、俺のせいでもあるわけだな。だから外食は諦め切れる。

「じゃあ、父さんたち行ってくるぞー！！2時間位で帰れると思うからー！」

「ああ！いつてらっしゃーい！！！」

父さんが言うには2時間らしいが、実際は3時間近くかかるだろう。いつもそうなのだ。

帰りにちよつと買い物して帰るとか言ってたし、姉貴もいるから絶対時間かかる。うん。

俺が冷静なる分析をしていると、一回で玄関のドアのしまる音が聞こえ、しばらくすると父さんの車のエンジン音が鳴り響く。

そしてみるみるうちに遠ざかって行った。

どうやら出発した様だ。良かった。

なら俺も、3時間だけ眠るとするか。

こうして俺は、みんなが帰って来る目での間、睡眠をとることにした――

――ギィィ……バタンツ……

「……んっ………？」

かすかに玄関のドアの音が聞こえた気がして、俺は目を覚ました。ボーっとする頭を何とか機能させ、重い体を起こし時計を見ている。現在午後9時48分。

皆が出かけてから、約2時間半が経過していた。

みんなもう帰ってきたのか。今日は早かったな。

俺は寝ぼけながらも、いつもより早い家族の帰宅に驚きつつ、再び布団にもぐりこんだ。まだ体がだるいからだ。

………だが。

一度目覚めてしまったためか、まったく眠れん。

いくら頑張っても、なかなか寝付けなかった。

こうなると暇してくるが、特にやる事もないし、だるいので頑張っ  
って寝ようとした。

そこで、10分ぐらいたっただろうか。その時にふと思った。

——声がしない。

そう、大勢で出かけているのなら、帰って来た時はその余韻よゐんが残って、いつもは少なからず騒がしいもののな。

一回がとても静かだ。物音一つしない。

「おっかしいな。もしかして俺に気を使ってるのか？」

一人でそう呟くも、なぜか妙に気になった。  
なぜなら姉貴がいるから。

いつも姉貴は、帰ってきたらすぐ自分の部屋へ駆け込むのだが、一向に2階に上がって来る気配がない。

これはおかしい。姉貴が俺に気を使う訳もないし…………。

俺が考えていると、一つの可能性が俺の脳裏をよぎった。

もしかしてあれか……！

姉貴はそーっと俺の部屋に来て、サプライズボディプレスでもするつもりなんじゃ……………！？

……ありうる。姉貴ならありうるのだ。

俺が調子悪かろうがなんだろうが、いつも驚くような事をする。

時にはクラッカーを俺の部屋のドアに設置して、ドア開けた瞬間に音が鳴り響いたり。

そして時には、俺のベッドにある布団が水で浸されていたり。

酷い時なんか、俺がインフルで熱を40度近く出して苦しんでいるのにも拘らず、笑えば治るとかいつて10分間くすぐり続けられたことも。

いつも俺を驚かせようとする、いうなれば歩くビツクリ箱だ。

一階で物音がしないのは、多分姉貴が皆に言っただろう。騒ぐなど。

ふふふ。それしかない。それしか考えられない。

残念だったな姉貴！！お前の策、見抜いたり！！

俺は姉貴の策（脳内妄想）を看破すると、元気よく自室から飛び出す。

風邪引いてろうが引いてなかるうが関係ねえ！！策が分かっているのに受けに回るほど俺はいい奴ではないのだ！！

若干テンション高めで階段を下りた時に俺が見た光景にまず一言。

「誰も帰ってきてねえ」

そう、真っ暗。

一回は闇に包まれており、誰かが帰ってきた気配などまったくない。

一応俺は玄関を確認してみる。面倒なので電気はつけないままだが。

靴は無し。一応外をしてみるか。

俺は玄関を開け、外を見てみる。だが肌寒いだけで、車はなかった。

「つーか、カギ掛ってたんだから、帰ってきてるわけないか」

俺はうんうん唸り、とても悩みながらマイ自室へと戻って行った。

そして俺は、自室のベッドに腰掛けた。

その時だった！！俺の脳は、この状況、この現状をすべて理解したのだ。

突然聞こえたドアの音……。だが1階には誰もいない……。つまり！！

「俺の勘違い。お疲れ様でした」

バカみたいな独り言を堂々とつぶやき、またベッドの布団にもぐりこんだ俺。

まったく、寝ぼけてたがために考えてなかったぜ。俺の勘違いを。そういえば聞こえてないような気もしてたんだよ。なに一人で盛り上がり上ってんだよ俺。無駄な体力と知力を使っちゃったぜ……。

とりあえず寝て、風邪を治そう。

自分自身に悪態をつきながらも、ちゃんと布団にもぐり、自分の体を第一に考える俺はえらいな。

自分を大事に出来ない男は、男じゃねえ。乙子だ。乙女の子と書いて乙子だ。

そう、自分に呆れ、悪態をついた後は必ず寝る。

俺は寝めれば延びる奴だからな。自分で寝めることによって無限に成長できるのさ。

……なぜ暇になるとくだらないことばかり考えてしまうのだろうか。  
謎だ。

いや、この思考は熱のせいだな。うん。俺は思ったより重症らしい。寝よう。

そう思い再び目蓋まぶたを閉じた。

——それからまた10分後。

俺の意識が夢の中へと運びこまれようとしている時だった。

——ギィィ……バタンツ……

まただ。

今度は聞き間違いではない。  
バツチリ聞いた。両のお耳でバツチリと。

俺は今度こそ帰って来たのかと思い、大きな声で一階へと声を送ってみる。

「おーい！！帰って来たのかー！？」

俺はすぐに平和ボケした声が返って来るんじゃないかと思った。  
だが……

返事がない。

返事どころか、また気配すら感じられない。

俺は確かに聞いたのだ。玄関のドアのしまる音を。

自分の家だ。音を聞き間違えるはずがないのだ。

ならなぜなのか。この摩訶不思議な状況を、俺の頭脳は容易に理解した。

「まさかどろぼう!？」

そう。泥棒だ。

自慢じゃないが、俺の家はかなり大きい。金銭面的にも余裕はある。

もし泥棒なら、俺達が今夜出かけることを知っていただろう。念入りな泥棒ならだけど。

で、みんなが出かけた所を見計らって家に侵入した。

でも俺がいると分かり、10分ぐらい物色した跡立ち去ったと考えるのが無難か。

俺は勝手に推理し、勝手に納得をした。……だが、その時気付いてしまったのだ。

……もしそれが本当なら、俺が最初に一階へ降りた時はまだ泥棒はいたことになる。

あの暗闇の中、ずっと息をひそめて俺を見ていたことに……

想像した瞬間に、背筋に猛烈な寒気が走った。

暗闇の中で目を光らせ、もしかしたら俺を殺そうとしていたかも

しない。

その恐ろしさは、幽霊なんかよりもよっぽど恐ろしいものだった。

その時俺は思った。

今はもういない。なにを取られたかを確認するんだ。

そう思った時には、俺の体はもう動きだしていた。あの一階へと。

慌てて部屋を飛び出して階段を下り、俺の視界に飛び込んで来たものは、最初の時と変わらず暗闇だった。

だが僕はそんなのにはかまっていられない。急いで家中の電気を点灯させた。

家中、いや正確には一階にあるすべての電気を、1分もかからずに点灯させた。

闇だった家は、一気に明るさを取り戻す。

そして少し俺はほっとした。

なぜなら部屋は荒らされていなかったからだ。

電気をつけて回った時、どの部屋も荒らされてはいなかった。

だが、だからといって安心はできない。

10分で帰って行ったという事は、なにか目的の物があつたからかもしれない。

そのものだけに狙いを定めてたとして、探すのに手間取ったとしたら。

そうになると、一番狙われやすいのが通帳や印鑑、キャッシュカー

ドなどの類だ。

そして母さんはいつも、引出しに入れている。

部屋を荒らされていなかったのは、引出しに入ったものを探していたからかもしれない。

あと俺がいたから。

音を立てると聞かれてしまうからだ。

だとすると、奪われているはず。印鑑や通帳が。

だが幸い、俺はいつも母さんが閉まっている場所を知っているがため、すぐに確認にありつけそうだ。

場所はダイニングキッチンの端にあるこのタンス。

実はこのタンスは特注品で、一目では分からないほどの小さな引出しが、一番右下の方についているのだ。

名付けて、カメレオン引出し。というわけだな。いやビックリ引出しか？ってそんな事はどうでもええねん！！

俺は自分自身に正論なるツツコミを激しく入れ、その噂のタンスの前に立った。

この古そうなタンスこそ、ビックリタンスなのだ。

全体的にこげ茶色で、木目の模様が入っているこのタンスの、一番右下のこの部分。

よく見ないと分からないが、小さな取っ手がついている。

この取っ手は画鋏がひょうぐらいの大きさだ。

さらには、タンスと同じ模様になっているので、正面から見たら

見分けがつかないほど。

かといって、横から見ても正直目を凝らさないと分からない。  
大事なものをしまうのには、絶好の隠し場所というわけだ。

俺はその取っ手に手を伸ばし、何の躊躇もなくオープン。で、結果は…………。

「うそだろ…………中身がねえ」

そう、中身は空だった。なに一つない。  
あるとすればその引出しの隅の方にたまった埃<sup>ほこり</sup>くらいだろう。

瞬間、俺は、『俺がいたのにも拘らず盗まれてしまった』という状況に、悔しさを感じずには居られなかった。

「くそっ！！俺はこの家すら守れないのかよっ！！」

絶望と悔しさにより、その場でへたり込む俺。  
だがその時、とても重要なことが俺の頭をよぎった。

なにがよぎったかを言う前に、ここでまた自画自賛タイムに入ります。

この絶望や悔しさの中でも、冷静かつ堅実に働く俺の頭…………脳は  
凄い。さすがは俺の脳と言ったところか。

何事にもとらわれないこの思考。この心。そしてそれらすべてを  
持ち合わせているこの俺ときたら凄過ぎて涙が出そうだ。

やはり俺は凄い。前々から思っていたけど王様なんかよりも凄い。  
この状況でこの思考が出来るのは、多分世界中でもこの俺ただ一

人だと思う。

それほどまでに凄いこの俺には、ノーベル化学賞たるものをあげてもいいぐらいだ。

え？なぜ科学賞かって？

それはもちろん、人体の科学だからだ。俺は科学しか信じないたちなんだ。

でもこの人体を作り出し、そのも持ち主であるこの俺は神に近い存在。いや、この俺に勝るものなどない。つまりは神だ。俺は神だったのだ。Y o u G O D ! ! !

英語に関しては合っているかは分からない。なぜなら俺は英語は苦手だからだ。

だが合っていると思う。Y o u は自分。G O D は神。つまり自分神だ。イコール俺は神という意味になると思う。

ってあれ？Y o u は自分じゃなかったかな。………はっはっは。

そんな細かい事は気にしないたちなんだ。多分あっている。そうに違いないのだ。うん。

それにもしこれが間違いでも、神の俺ならこれを国際的に正しくすることが出来る。何せ神だから。

つまり俺は神だ。神。それ以上でもそれ以下でもなく、神。いや、神以上だな。うん。

自画自賛タイム終了のお知らせ。

で、この神たる俺の脳裏によぎったこと。それは。

俺は一呼吸置いてから、誰もいないこの部屋で、カッコよく呟く。

通帳と印鑑。その他もろもろの行方。ゆくえそれはだな……………

「母さんのかばんの中だ！！！」

そうなのだ。いつも母さんは出かけるとき持っていくのだ。  
だからこの場にはないのは当たり前。常識。当然の結果。

つまりは泥棒なんて入ってこなかったんだよ！！

よくよく思い出してみれば、一番最初、車があるか確認した時に、  
足跡なんてついてなかった。

もし泥棒が家に侵入したのなら、足跡はおろか、靴の泥ぐらいは  
付いているはずだ。

なぜなら今日、雨が降ったから。

はっはっは。どうだ馬鹿野郎。まいったか犯人！！お前は俺の家  
には来なかったんだよ！！つまり原因はお前じゃない！……お前じ  
やない？

じゃあ、誰だったんだろう……あの扉の音は。

俺のデットヒートした脳内は、次第に冷静さを取り戻して行く。  
それと同時に、この謎の現象の恐怖に満たされていった。

「……………まさか。幽霊……………とか？」

冷静化した俺の思考は、この俺をある一つの答えへと導いていた。

そう、幽霊だ。お化けだ。心霊だ。

いやだけどそんなはずがない。だって幽霊は空想のものなんだか  
ら。

俺は頭の中で必死に繰り返すも、この嫌な感じはぬぐえない。  
あるわけないと自分に言い聞かせるが、俺の心はもう幽霊の二文  
字により恐怖していた。

俺は非科学的なことは信じないタイプだった。でもそれは経験し  
たことがないからだ。

経験すれば嫌でも信じるしかなくなる。だから俺は、今日限りを  
持つて幽霊を信じることに決めました。

今までの概念をきっぱりと捨てられる。切り替えが早いことも俺  
の長所だ。

そして、俺は推理モードへと突入する。

この現象はすべて幽霊ということになるが、その場合どの幽霊だ  
ろう。

その辺にいた奴か、はたまたひいじーちゃんか。

多分ひいじーちゃんだと思う。なぜなら思い当たる節があるのだ。

幽霊完全否定だった俺は、ひいじーちゃんの仏壇に線香を嫌々あ  
げていた。

ホントは面倒でやりたくはなかったが、ひいじーちゃんが悲しむ  
という理由で母さんに無理やりやらされたのだ。

やるまで夕飯抜きとか言われたんだぜ？さすがの俺も、夕飯の魅  
力には勝てねえからな。

その時だけ生ける奴隷どれいと化したね。

でも嫌々だった。頭の中で、『てめえのせいでこんな面倒な事さ  
せられちまったじゃねえか！』と思っていたことも多々あった。

つまり、痺れを切らしたひいじーちゃんが化けて出てきてもおか

しくはないのだ。

そう考えると、ちょっと悪いことしたなと初めて気付く。

そう、この状況だからこそ。俺が今、幽霊大賛成派へと変わったからこそ思えた気持ち。

だが今さらだ。そんなもの今さらにすぎない。だから俺は、恐怖しているのだ。

見えない謎の存在に。

俺は少し怯えながら、仏壇のある部屋の方向へと目を移す。

と言つても、壁やドアなどがあつて仏壇は見れないのだが。

なぜか、俺は視線を仏壇のある方へやったのだ……その時だった。

『へいひ……いつひよひ………』

と、誰もいないはずのこの部屋に声が響き渡る。

俺はその声を聞き、頭で理解するよりも先に、恐怖心で、最初に説明した寝室のあるふすまへと張り付いていた。

多分読者は、何を言っているのか分からなかったと思うが、俺はその声の主がひいじーちゃんだという事がすぐに理解できた。

突然だが、ここで過去の話へと突入。

——そう、それは昔のこと。

俺がまだ小学校低学年の頃だ。俺は気になり、姉貴に聞いてみたんだ。

『ねーちゃん。なんで仏壇のおじいちゃんは死んじゃったの？』

なぜその時の俺はそんな事を聞いたのかというと、丁度その日、学校で命について勉強してきた所だったのだ。だから気になった。それだけだ。他に理由なんてない。

そんな俺の質問に、笑顔で姉貴は答えてくれた。

『ここだけの話、仏壇のおじいちゃんは舌を切って死んじゃったらしくてね。上手く喋れないんだってさ』

『えー。可哀そうだなあ』

ここで途中だが、回想終了。

そう、まったく俺の質問の答えになっていない答えを言った姉貴。だがその姉貴が言っていた。舌を切ったと。

つまり、上手く喋れない。そこでさっきの声を思い出してもらおうか。

ひよへひゃひいへひえひよ。みたいなこと言っていた気がする。

つまりはそういう事だ。なんかお年寄り見たな声だったし、間違いない。

だから俺は恐れている。そう、だから俺は寝室のふすまに張り付いているの……だ……。

ここで俺は思った。思ってしまったのだ。

……俺、寝室の電気付けたっけ……？

そう、一回の電気はすべてつけたと思っていたが、寝室だけは入ってなかった。

その証拠に、すべての場所のドアは開いているにもかかわらず、この寝室のふすまだけは開いていない。

慌てていた俺が、わざわざ閉めるとは考えにくい。現に他のドア達はフルタイムオープン状態なわけだし。

ってことは、俺は入っていない。つまり、電気も付けている訳ないのに……ついでに。

そう、ついでに。寝室の電気が！隙間からもれる光がその証拠だ。

そして俺が、その異変に気付いたとほぼ同時だった。

寝室の方から、凄いの音が聞こえた。

えーと、声で表すとこんな感じ。

『ガラッドカッバキッガラッゴロ』

明らかに何かが崩れ落ちる音だ。この音は段ボールだな。うん。確か寝室には、姉貴が意味もなく押し入れに段ボールを突っ込んでいた気がする。多分それだ。

大体頭の中でまとまった俺は、すぐに躊躇なく寝室のふすまを開けた。そこには…………

まず第一に視界に飛び込んできたのが、段ボールの山。そしてその段ボール達が飛び出してきたであろう、開いた押入れのふすま。

……おかしい。押入れのふすまがぁいている。いつもは閉め切っているはずだ、こうなるから。

そこがぁいているというkとは、誰かがあけた証拠だ。

だが現在我が家には俺一人。おまけで大葉家のひいじーちゃん。いや、お化けのひいじーちゃんだ。

俺があけてないとすれば、これが噂の心霊現象なるものに……！！

俺は今すぐ逃げ出したくなったが、そこは俺。お利口さんなので、泥棒の場合も考えてみた。

でも、それはすぐに無しと判断された。なぜなら、玄関のドアの音は二回だけだったからだ。

家に入って、家から出た。その二回のみ。

もしかしたら俺が寝ている間に侵入した可能性もあるが、さつきも言った通り足跡どころか泥すらついていないのはおかしいのだ。

そして何より、俺が聞き逃すはずがない！！

それらのことを含め、泥棒ではないと判断。てことは……

ふたたび、俺の嫌な想像が頭をよぎった。その直後だった。

『……………れいじ……………』

俺の耳元で、この声が響いた。

「うわあああああ！！！！！！？」

俺はすぐに慌てて、その場からはなれ、すぐ近くのキッチンの隅  
っこで丸くなつて怯えていた。

さすがの俺も、幽霊にはかなわない。この小説も終盤だが、力  
ッコよく戦闘パートとかは入れないよ！！

だってデータがない。幽霊という部類のデータが少ないのだ。相  
手の弱点もわからなければ、特徴すらも分からない。

だから俺は、キッチンの隅っこで丸くなりながら、完全に耳コピ  
である般若心経はんにやしんきょうを唱え続けることしか出来なかった。

そんな時だった。俺の般若心経のおかげなのかそうでないのかは  
分からないが、キッチンの上の、いわゆる調理場の所から何かが俺  
の頭に降ってきた。

「うわっ！なんだ！？てか痛いっ！地味に痛いっ！」

俺の頭に地味なる痛みをもたらしたそいつを、俺はろくに見もし  
ないで拾い上げた。

で、ちゃんと見るとそれは……………歯。人間の歯だ。

「う、うわあああ!!?」

あり得ない。こんな所にあるわけがない!!人間の……人の歯だ  
ああアアあ!!!

俺は混乱……族に言うパニック状態に陥り、その歯をぶん投げよ  
うとした時だった。

『わひほは……はははっははほは』

見る人によつては、馬鹿笑いしている魔王にしか聞こえない声を  
あげ、何かが近づいてくる。

そしてその気配は、俺のすぐ後ろで止まり……俺の肩に……トン  
トン♪

♪↑これを脳内で付け足してみても、全然雰囲気は和らがない。  
だから俺は、怯えながら振り向いたのだ。よく頑張ったな。俺。

俺が振り向いて目にしたものの……それは。

まず茶色の腹巻きが目の前に。

視線を上によらずと、ニヤニヤと薄気味悪い笑みを浮かべて、顔  
中しわくちやで頭がツルツル。

まさしくお年寄りの男性が立っていた。

そして次に驚いたのが、その男性は歯がなかったのだ。

そしてそんな事よりぶつちぎりナンバーワンで驚いたのが、それ  
が俺のじーちゃんだったことだ。

現実と書いて、リアル世界の生きているじーちゃん。  
皆と出かけたはずのじーちゃんだ。

「ほへ、わひほいは」

困惑している俺に向かって、じーちゃんが言った。

ほへ、わひほいは。と。つまり、『それ、わしの入れ歯』と言っているのだ。

じーちゃんが指差した方向には、俺が驚掴みにして、先ほどまでぶん投げようとしていたものが。

これ……よく見るとじーちゃんの入れ歯だ。

俺は良く分からなくなり、無言でじーちゃんに入れ歯を渡した。  
すると元気よく、カポツッと良い音が鳴り、陽気に喋る出すじーちゃん。

「はっはっは。やっと喋れるわい。ずっと探しておったんじゃよ。  
わしの入・れ・歯」

……なるほど。俺はまず一つだけ言いたい事が出来た。

「紛らわしい事するなよじーちゃん！！なにが『入・れ・歯・う  
ふっ』だよっ！！」

「ちよいまで。『うふっ』は言っとらん。わしゃ、そんなキモ男ではないわい」

ちょ、キモ男って。なんでそんな言葉知ってんだよじーちゃん。

ってかあれだろ？出かけてたんじゃないのかよ？

「じーちゃんは出かけなかったのかよ？」

「いやそれがのー！出かける直前で入れ歯がない事に気付いてからに、入れ歯ないと飯くえんってなったのお！わしも行くのはやめたんじゃよ！はっはっは。」

はっはっは。俺はなぜか心が重傷だよ。

「じゃあ、寝室の段ボールもじーちゃんだな？」

「はっはっは。あれは困ったわい」

とりあえず、すべてはじーちゃんだった。

じーちゃんの話をもとめると、入れ歯を探してふすまを開けたら段ボール落下。

俺が見たときは、『じーちゃん段ボールに埋まっておったわい』らしい。

で、すべての始まりである玄関のドアの音は、『なんとなく外の空気が吸いたくなってのー！じーちゃん困ったね』らしい。

つまり、二回音がしたのは家に侵入して出て行った音ではなく。外の空気が吸いたいたために、顔だけ出して、空気を吸ってまた家の中へ。らしい。

で、数分後にまた空気が吸いたくなり、また同じ行動を繰り返し

た訳だ。

つまり、家の中に出たり入ったりではなく。意味もなく二回開けたというわけだ。これは予想外だった。

「つーかじーちゃん！入れ歯ないのに喋るなよ！俺本気で驚いたぞ！」

「すまんのお。れいじ！」

まったく。紛らわしい。

……その時だった。また俺の頭脳が開花したのだ。どんな状況でも対応するこの頭脳は、時には気にしなくていいことまで考えてしまう。

俺がふすまを開けて啞然としている時。

俺は寝室じゃない、俺の真後ろから。入れ歯がはずれて喋れないはずのじーちゃんに『……れいじ……』と、確かに名前を呼ばれた。

………これはどういう事だよ。

俺の脳内に走った嫌な予感が、じーちゃんの言葉で現実化する。

「それよりれいじ。後ろの彼女……いや、お友達は誰なんじゃ？」

………エ？オトモダチ？ジーチャンナニッテルノ？

「れいじ！お友達がお見まいにきたなら一言わしに言っておくのが礼儀ってもんじゃ……！」

……ダカラ、オトモダチガオミマイツテナニ？ジーちゃん  
トウトウボケタ？

「おいれいじ！きいとるのかー！」

俺はしばらく硬直したのち、無意識にジーちゃんに聞いてしまった。

「ジーちゃん……いま、なんていったの？」

「だから、わしの話を聞いているのかと」

「そのまえ」

「その前と言いますと……お前のその後ろの……」

じーちゃんがそこまで言うと、俺はもうじーちゃんの声は耳に届  
かなかった。

後ろ。俺はゆっくりと後ろを向いた……そこには。

「う、うわあああ……！！！！！！」

ここで俺の意識は途絶えた――

――それから何日かたって。俺はゆっくりと目を覚ました。  
最初に飛び込んできたのは、白。白い素朴な天井だ。

そして周りを見渡すと、俺の家族が心配そうに俺を見て、さらには看護師さんまで。

これを病院と呼ばずしてなんと呼ぶ！！状態だった。

話によると、俺は半日目覚めなかったという。以外と短期間だな。俺の生命力すげえな。

そのあと色々診察受け無事退院。退院直後に姉貴にアップパーを食らってまた一週間入院したが、そのあとまた退院。

で、俺は平和な我が家に帰って来たのだった。

——余談だが、プロの霊媒師のかたによると、俺の家には霊がすみついているらしい。

でも驚く事ではない。なにせ、ひいじーちゃんなのだから。

そう、俺が気を失う前に目撃したのは、とても優しそうな顔のひいじーちゃんだった。

顔は覚えてないが、仏壇にある写真で見ていたので知っていた。その顔と瓜二つだったのだ。

そのひいじーちゃんは、俺の事を恨んでいたわけではなく、一緒に遊びたくて出て来てしまったとか。

だから、俺の耳元で囁いたのはひいじーちゃんなのだ。

ちなみに、舌切って死んだってのは姉貴の大ウソ。

本当は家族に見守られながら、『わしプリン食いてーよ！』と言いながら元気にご臨終したらしい。

そう。だから俺は、毎日仏壇にプリンをささげ、線香もあげるよ

うになった。

それからというもの、ひいじーちゃんは俺の夢枕にしか立たなくなっただ。

昨日は、夢でひいじーちゃんに『わしゃあもうプリン食べねー！』って言われたので、最近ヨーグルトをささげている。

これで無事解決かと思われたこの出来ごとに、俺の頭脳はまた見つけてしまった。

この出来事に隠されたの裏のミステリーを。

さて、みんなは見つけられるかな？それでは、じゃーねー！！

などというフリはやめておこう。で、そのミステリーとは。

そう俺は、ひいじーちゃんにとりつかれたといっても過言ではなくなっただから。

いや、正確にはひいじーちゃんに会ったその日から、リアルの生きているじーちゃんが信じられなくなってしまった。

それはなぜかって？皆も分かっているだろう。

少なからず、違和感を覚えたはずだ。

このじーちゃん！ユーレイのひいじーちゃんを見てなんて言ったよー！？

『それよりれいじ。後ろの彼女…いや、お友達是谁なんじゃ？』

『後ろの彼女…いや、お友達是谁なんじゃ？』

『後ろの彼女』

彼女じゃねー！！！！どう見てもジジイだから！！ポツクリ逝っちゃうてるジジイだから！！

そんなわけで、俺はその日から、じーちゃんの視力を信じられなくなっちゃったんだよ。

『つーか眼鏡買ってくれ』。って言ったらあのじーちゃんなんて言っただろう？

『わしや、メガネ入らんガネ』

はいくだらねー！チョーくだらねー！くたばれジジイ！！

そして完全に終わるタイミングをミスった作者さんから一言。

主人公、つまり俺の名前には、ある単語が隠されているんだよ。

ってええ！？そうなの！？知らなかった。

それじゃー！さよならー！！ってまって！？答えとかないの！？気になるー！！

答えはあとがきで発表！！ってまじかよ！！おい作者ー！！！！！！くそっ終わりの時間だ！じゃーねー！！

完。

（後書き）

どうも、ポンジュニアと申します。

この長いわりに内容が薄い小説を最後まで読んでいただき、本当にありがとうございます！！

そして主人公の名前に隠された謎。  
それはですね。

大葉 玲次。  
おばれいじ

並び変えると、おじいれぱ。

つまり、叔父入れ歯！叔父さんの入れ歯を意味してました！！

下らなくてすみませんでした。本気で反省してる。

こんな駄作を呼んでいたいた皆様には、感謝の言葉でいっぱいです。

地味に製作時間1時間という短さなので、読みやすさは保証できなかったんです。ごめんなさい。

そして愛想笑い歌劇団の方（だから誰だよ）。愛想笑いしてください。お願いします。

以上、ポンジュニアでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0606z/>

---

じーちゃん怖い。

2011年12月2日20時45分発行